

令和元年 10 月 1 日

2019 年度 奈良県立医科大学・和歌山県立医科大学
学生災害ボランティアバス 復興支援活動
活動報告書

NARA Will
奈良県立医科大学学生災害
ボランティアグループ

1. 活動概要

奈良県立医科大学学生 11 名、和歌山県立医科大学学生 7 名は 2019 年 8 月 20 日（火）から 24 日（土）の 5 日間、福島県、宮城県、岩手県において被災地域の視察やボランティア活動など実施した。

福島県内では福島県立医科大学の学生とともに災害医療に関するセミナーの受講、浜通り地域の視察、東京電力廃炉資料館、中間貯蔵工事情報センターの見学、南相馬市立病院院長及川友好先生のご講演を通じて災害時の医療の問題点、地域医療の課題、福島第一原発事故の概要、現状について学んだ。また、南相馬市社会福祉協議会様のご協力により、デイケアでの傾聴ボランティアも行った。宮城県と岩手県では東松島地域、気仙沼市、陸前高田市の視察、気仙沼市立病院成田徳雄先生のご講演を通じて、津波災害の恐ろしさ、福島との違いなどを学んだ。

今回の活動は、JR 西日本あんしん社会財団、奈良県立医科大学の助成を受けて行うことができた。

2. 主な活動

20 日（火）	朝:伊丹空港から仙台空港へ移動 午後：災害医療セミナー受講（福島県立医科大学）
21 日（水）	午前：帰還困難区域の視察（双葉町、大熊町） 昼：東京電力廃炉資料館見学 午後：南相馬市立総合病院院長及川先生による講演
22 日（木）	南相馬市にて傾聴活動
23 日（金）	午前：東松島市視察 午後：気仙沼市立病院成田先生による講演
24 日（土）	午前：気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学 午後：陸前高田市視察 夕方：仙台空港から伊丹空港へ

3. 参加学生

医学科 5回 田中俊志、齊藤正一郎

医学科 3回 酒匂渚

医学科 1回 赤樫晴斗

看護学科 4回 阿部彩乃

看護学科 3回 伊藤龍司

看護学科 2回 大谷結生、尾籠七海、堀江周

看護学科 1回 宮崎結奈、宮永唯

4.夏の災害医療セミナー

福島医大にて奈良医大、和歌山医大、福島医大の3校合同での災害医療セミナーを行った。参加した学生で「東日本大震災に対して今まで自分が起こした行動」や「東日本大震災に対して聞いたり見たりした事」などを、KJ法を用いてディスカッションを行った。そして出来上がったものをグループごとに発表し、それぞれの活動や知っていることを共有し、理解を深めた。また、福島医大健康リスクコミュニケーション学講座准教授 村上道夫先生、医療人育成・支援センターの安井清孝先生よりリスクコミュニケーションについての



KJ法を用いてディスカッションする様子

講義をしていただいた。講義のなかで災害に遭われた方に対する関わり方の例題を出していただき、それをグループごとに話し合い、実際どのような行動をとるべきなのかを考えた。それにより、医療者になるものとして、相手の表面的な発言の奥にある思いを考える大切さを学んだ。

去年はできなかった3校合同での講義・ディスカッションを通して、地域によって知識や思いの違いがあることを知り、それを共有出来たことでそれぞれが新たな考えを持つことが出来た。

5.飯舘村の視察

車窓から視察すると、至る所に線量計が見られ、道の駅などの公共施設には必ず設置されていた。また、住民が戻ってきていないからか、震災以来放置されているとみられる田畑を確認できた。飯舘村では、飯舘村交流センターであるふれ愛館を見学した。館長が施設内を案内してくださり、住民の方が施設を利用している様子、館内の設備を見ることができた。

また、飯舘村の住民の方の生活の様子、どれくらいの人が震災後戻ってきているかについての説明を受けた。



飯舘村交流センターふれ愛館で館長のお話を聞く様子

6.帰還困難区域（双葉町、大熊町）の視察

今もなお、帰還困難区域になっている地域を国道 6 号線の車窓から視察した。帰還困難区域の入り口と出口には警察官が立っており、侵入防止のためのフェンスが張られている道も見ることができた。福島第一原子力発電所に近いことから線量も他の地域と比べると高くなっており、人が少なく、震災直後のままだになっている建物の様子が見られた。また、汚染土を運ぶトラックが多く走っており、除染作業が盛んに行われていることが想像された。帰還困難区域の中にある中間貯蔵工事情報センターの見学では、除染作業の現在の状況や、中間貯蔵区域についての説明を受け、現場の状況を知ることができた。

昨年度も訪れた参加者からは、区域内で作業する人の数や車の量も増えこの 1 年で大きく復興が進んだように感じたとの声が多く聞かれた。



車窓から見た帰還困難区域の様子

7.東京電力廃炉資料館の見学

東京電力廃炉資料館の見学では、東京電力の社員の方から東日本大震災時の第一原子力発電所の事故の経緯、事故が起こってしまった原因、現在の廃炉作業の現状について説明を受けた。説明は分かりやすいと感じたが、被災した方側からではなく、東京電力側からの説明という印象を強く受けた。

また、現在の原子力発電所での作業状況の説明を受け、今尚増え続けている汚染水の現況など、難しい問題とともに、これからも除染作業は何十年という単位で行なっていかなければならないことだということを改めて実感した。

8.南相馬市立総合病院院長 及川先生による講演

震災当時の状況と、震災によって変わった生活状況が健康にどのような影響を与えたのか、それに対する支援などについての説明を受けた。多くの病院が機能しなくなる中で、南相馬市立総合病院は震災直後も役目を果たし被災地を支えたが、原発事故後、放射線の影響により避難する方がたくさんいた中で、病院に残るかどうかという医療者の葛藤があったことなど、震災当時の状況をありのままに、医療者の心情、精神状態についての説明を交えて語っていただいた。及川先生の講義を受けて、被災地の今、そして医療について改めて考えることができた。震災時、医療者は被災者であったとしても支援を受ける側から支援をする側にまわらなければならない。自分が住んでいる地域で震災が起こった時、医療者として何ができるのか改めて考えさせられた。



及川先生との集合写真

9.傾聴ボランティア

南相馬市社会福祉協議会様のご協力のもと、3つのグループに分かれ福島県南相馬市鹿島区にあるサポートセンター希望、ひまわりデイサービスセンター、すみれデイサービスセンターで傾聴活動を行った。昨年度までとは異なり今年度は要介護認定を受けている高齢者の方々が利用されているデイサービスでのボランティアも行うことができた。利用者のほとんどの方は仮設住宅を離れ、自宅で過ごされている。午前中は血圧測定やお風呂介助など施設の方の手伝いをしつつ学生が個々に利用者の方々と交流した。午後からは全員で体を使ったじゃんけんや、個々では折り紙やあやとり、オイルマッサージを行った。特に折り紙やあやとりは懐かしが



折り紙をして打ち解けながら傾聴活動をする様子

られる方が多く、盛り上がり楽しんでいる方が多くみられた。お話をすることで、震災のことを話してくださり、辛さや悲しさを感じることもあった。戦争と同じくらい忘れられないと話す方もいた。しかしだからと言ってずっと落ち込むのではなく、自分なりに前向きに生きようとしている方も多かった。また、将来医療者となる私たちにとっては大変貴重な経験をさせていただいた。



夏祭りの催し物でもぐらたたきをしている様子

10.宮城県内視察

4日目は気仙沼に移動した。その途中で東松島地区に立ち寄り、旧野蒜駅にある震災復興メモリアルパークの見学を行った。メンバーの1人に震災直後に東松島にボランティアに入った人がおり、当時の状況やこの8年で変わった点についての話を聞きながら見学を行うことができた。津波で更地となってしまった所や、当時のままの駅を見ることで、改めて津波の恐ろしさを肌で感じさせられた。



被災したまま残した旧野蒜駅プラットフォーム

自分の身長を遥かに越す高さの津波が襲ったことを想像すると、恐ろしく、自然を前にして人間には何ができるのかということを考えさせられた。

また、福島からの移動の際に高速道路が津波警報発令時の避難場所となっていることや、道の至る所に津波浸水区域の看板が立っているのを確認し、生活と津波を常にリンクさせて考える環境になっていると感じた。



伝承館の外壁に津波の到達地点が記されている

11.気仙沼市立病院 成田先生による講演

気仙沼市立病院で災害医療に関する講義を受講した。震災当時災害対応にあたられた成田先生の講義を通じて、災害発生時の初動や地域間での連携がいかに大切であるかを学んだ。当時、実際に対応の中で苦悩された、避難者の数に対して食料の数が不足している場合、その食料を配るのかどうかといった事例をもとに、それぞれの選択をした場合のメリット、デメリットを考えるワークを通して、災害対応の難しさを感じた。また、災害時に増加する肺炎や破傷風を予防するために特別な対応ではなく、手をこまめに洗う、うがいをする等当たり前のことを当たり前に行うことが大切になると学んだ。また、昨年度も参加したメンバーは昨年訪れた、石巻との違いを感じることができ、同じ災害であっても地域によって問題となったことやとられた対応は異なっているということを改めて感じさせられた。



成田先生との集合写真

12.気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館見学

5日目の午前中は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館に訪れ、気仙沼の震災当時の津波や火事の映像、被災して家族を亡くした方がお話ししている映像を見た。また、語り部の方に案内していただいて被災した気仙沼の町の写真を見たり、津波の被害をそのまま残した気仙沼向洋高校旧校舎を見学した。津波の映像を見て、被害を受けた校舎を実際に見学すると、改めて自然災害の恐ろ



語り部の方との集合写真

しさを感じた。泥にまみれた教科書が散らばった教室、泥で汚れた廊下の手すり、津波で流されて教室に入ってきた車、割れた窓ガラス。実物を見ることで、津波の脅威をひしひしと感じた。津波の恐ろしさと逃げることを次の世代にも伝えなければならぬと思った。



気仙沼向洋高校旧校舎を見学する様子

13.陸前高田市視察

5日目午後からは岩手県陸前高田市に向かい、陸前高田市内、奇跡の一本松を視察した。一本松を見に行く為にまだ舗装されていない道を歩いた。市内はかさ上げ工事をしていて、工事車両が多く、人通りは少なかった。津波で流された町の復興には、町によってスピードに差があることを感じた。同時にこの現状を知り、忘れずに寄り添っていくことが大切だと思った。



陸前高田市の奇跡の一本松

14.全体を通して

震災から、8年半がたった今、関西から東北に行くことの意義について、それぞれが考えながら過ごした5日間になった。前年度までとの一番の違いとしては福島での、力仕事のボランティアを行わなかったことである。ニーズの減少や、帰還が進んでいないことなどがあり、大人数の受け入れが難しくなっていることに伴い、ボランティアセンターの休業日が増え、調整を行うことが出来なかったためである。参加者からは、「力仕事がやりたかった」、「傾聴ボランティアの為に東北まで行く意味があるのか」などの意見も聞かれたが、最終日にはボランティアはあくまでも被災地、被災者の為に行うものであり、自分達の満足感の為にやるものではない。むしろ、団体での力仕事のニーズが減少したことを復興が進んだと喜ぶべきではないのだろうかとの意見も聞かれるようになった。特に複数回参加したメンバーにとっては、昨年までとの違いを深く感じるボランティアバスになったのではないだろうか。昨年度も参加した者としては、今年初参加となったメンバーには、是非来年も訪れ、

今年との違いや、初めての時とは異なる見え方、感じ方を自身の目や耳、心で受け止めて欲しいと思う。

また、今後の課題としては、8年半がたち新入生も震災を知らない、よく覚えていない世代が増えていく中でどのように伝えていくのかという点が挙げられる。実際に足を運んだもの達が見たもの、感じたものを話すだけでも関西から、東北に行く意義はあるのではないだろうかと感じる。福島医大、和歌山医大との絆も大切にして今後も東北への継続した支援と、次の世代への継承を行っていきたいと考える。

15.協力

公益財団法人 JR 西日本あんしん社会財団

南相馬市立総合病院

気仙沼市立病院

福島県立医科大学（災害医療総合学習センター、Fukushima WILL）

南相馬市社会福祉協議会 鹿島区福祉サービスセンター

サポートセンター希望

ひまわりデイサービスセンター

すみれデイサービスセンター

公益財団法人福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県青少年会館

双葉屋旅館

南三陸まなびの里いりやど

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

東京電力廃炉資料館

飯舘村交流センターふれ愛会館